

上杉文秀講師を偲ぶ

故上杉文秀略年譜

慶應三、卯、一歲

正月朔日、愛知縣三河國上佐々木郷ニ生ル。父ハ小島放牛、母ハしづ子。小島放牛ニ四男三女アリ。文秀ハソノ第五子第三男ナリ。長女長男及ビ文秀以外ハミナ早世ナリ。文秀幼名ヲ乙也ト稱ス。(生日ハ後ニ故アリテ二月朔日トナリ居レリ。)

明治七、戊、八歲

上佐々木村正福寺山田文成師ノ門ニ入ル。

同 八、亥、九歲

僧タラント志シ、爾後文成師ノ薰陶ヲ受ク。

同 一、寅、一二歲

十二月二十日、父放牛ノ死ニアフ。

同 一、酉、一九歲

三河教校ヲ卒業ス。

同 一、戌、二〇歲

六月九日、三河第十三組正福寺ニテ得度。初メテ高倉夏安居入衆。

同 二、亥、二二歲

徵兵検査ヲウク。身長五尺四分、輜重兵合格。

同 二、子、二二歲

一月、上洛、冷香院椿潛龍講師ノ門ニ入ル。三月二十六日、擬得業ノ稱號ヲウク。

四月、眞宗大學寮専門別科ニ入ル。

十二月二十六日、楠、山田兩師ノ命ニ依リ、加賀國第二組聖德寺ニ入り、第十八世住持上

杉慧義ノ養嗣子トナリ、ソノ長女秀子ト結婚ス。

同 三、寅、二四歲

七月二十二日、眞宗大學寮専門別科卒業、准進學トナル。

同三五、辰、二六歲 九月一日、實母しづノ死ニアフ。

同二六、巳、二七歲 七月十八日、専門本科ヲ卒業シ、進學トナル。

同二七、午、二八歲 五月二十三日、聖德寺副住職ヲ命ゼラル。七月四日、學師補トナル。

同二九、申、三〇歲 二月二十六日、冷香院講師ノ死ニアフ。七月十三日、研究科第一部卒業、七月十七日、學師ニ補セラル。八月二十八日、眞宗京都中學教授ニ任ゼラル。九月八日、專攻院出勤、十月、願ニ依リ差シ解カル。

同三〇、酉、三一歲 一月二十九日、眞宗京都中學教授ヲ免ゼラレ、六月二日、眞宗東京中學教授トナル。(三十四年七月迄繼續)

四年七月迄繼續) 四月十五日、東京曹洞宗大學林餘乘講師トナル。(三十二年七月迄繼續)

同三一、亥、三三歲 九月十一日、東京教導講習院教授ヲ兼務ス。(三十五年七月迄繼續)

同三四、丑、三五歲 十月一日、眞宗大學教授ヲ命ゼラル。(四十四年八月迄繼續)

同三五、寅、三六歲 十一月二十六日、擬講ヲ命ゼラル。

同三七、辰、三八歲 七月十七日、香雪院山田文成師ノ死ニアフ。

同四〇、未、四一歲 二月二十一日、學階條例ニ依リテ、改メテ擬講ノ稱號ヲ受ク。

同四一、申、四二歲 九月十一日、宗教大學講師トナル。(四十四年八月迄繼續)

同四三、戌、四四歲 七月十九日ヨリ九月十日迄、山命ヲ奉ジ比叡山ニ留學シ、台密三昧流四度加行ノ相傳ヲ受ク。

十月三日、養父花開院釋慧義ノ死ニアフ。

同四四、亥、四五歳

三月二十九日、聖徳寺第十九世ノ住職ヲ拜命ス。九月六日、眞宗大學ノ教職ヲ辭任ス。九月、再ビ比叡山ニ登リ傳法灌頂ヲ受ク。

十二月三十一日、第三功章ヲウク。

大正元、子、四六歳

二月十日、嗣講ノ稱號ヲウク。

二月十六日、前住花開院ノ遺志ヲ傳へ、本堂再建ノ議ヲ門徒ニ計リ、全會ノ一致協賛ヲ得テ茲ニ再建ノ事業ニ着手ス。

同三、寅、四八歳

安居ノ次講ヲ命ゼラレ、觀經疏妙宗鈔ヲ講ズ。九月一日、眞宗大谷大學教授ニ任ゼラル。

同四、卯、四九歳

一月三十一日、姉とく女ノ死ニアフ。

同六、巳、五一歳

七月二十二日ヨリ九月二十日迄、住田智見、稻葉園成ノ二師ト共ニ支那佛教ノ視察ニ赴キ、遠ク天台山ニ迄登リ來ル。

同七、午、五二歳

八月一日、一等恩賞ヲ授ケラル。

十一月二十一日、養母政子女ノ死ニアフ。

同九、申、五四歳

七月、眞宗大谷大學教授ノ職ヲ辭シ、自坊ニ歸リ、再來聖徳寺ノ經營ニ意ヲ注グ。

同十、酉、五五歳

二月一日、侍董寮出仕ヲ命ゼラル。

上杉文秀講師を偲ぶ

三月二十八日ヨリ三十一日迄、三晝夜、自坊ニ宗祖大師六百五十年御遠忌ヲ嚴修ス。

五月三日、御遠忌記念トシテ三日講ナルモノヲ發會シ、生涯ノ教化事業タラシメント志ス。
 (蓋シ三日ハ養父花開院ノ命日ナリ。依リテ一ハ報恩ノ志モアリテ此日ヲ選定シ、毎月三日

ニハ必ズ自坊ニ在リテ午前午後法話ニ講話ニ、終日ヲ門信徒ノ教導ニ専心シタルモノニシテ、晩年病ニ倒ル、迄、遂ニソノ志ノ如ク、一回モ休止セシコトナシ。)

六月四日、實母ノ如ク慈シミヲ受ケシ、師正福寺山田文成師ノ室妙證尼ノ死ニアフ。

夏安居次講ヲ命ゼラレ、觀心略要集ヲ講ズ。

同一二、亥、五七歲
 同一三、子、五八歲

七月十九日、講師ノ稱號ヲ受ク。

同一四、丑、五九歲

夏安居本講ヲ命ゼラレ、往生要集ヲ講ズ。

昭和元、寅、六〇歲

八月二十五日、兄小島團藏ノ死ニアフ。

十二月二十九日、權僧正ニ補セラル。

四月一日ヨリ四日迄、三晝夜、聖德太子千三百年御遠忌ヲ自坊ニ嚴修ス。

同 四、巳、六三歲

八月二十一日、眞宗大學院ノ教授ニ任ゼラル。

同 五、午、六四歲

四月十一日、宗學院ノ指導ヲ命ゼラル。夏安居ノ本講ヲ命ゼラレ、往生禮讚ヲ講ズ。

同 六、未、六五歲

八月二十六日、大谷大學長ニ任ゼラル。

同 七、申、六六歲

八月三日、一等旌賞ヲ受ク。

同 八、酉、 六七歳

夏安居本講ヲ命ゼラレ、唯信鈔文意ヲ講ゼントシ、開講ノ前日タル七月十日、洛北ノ寓居ニテ輕微ナル腦溢血ノ爲メ、病床ノ人トナル。爲メニ開講スルヲ得ズシテ了ル。

十月十八日、住職ヲ長男慧岳ニ譲リテ、前住職トナル。

同 九、戌、 六八歳

四月十一日、遂ニ病ノ故ニ大谷大學長ノ職ヲ辭ス。

爾ノ後、専ラ自坊ニ籠居シテ靜養ニツトメ、傍ラ生涯ノ研究タル「支那日本天台史ノ研究」ノ整理ニツトメ、ソノ刊行ヲ劃ス。

四月三十日、一等准上座出仕ヲ許サル。

同 一〇、亥、 六九歳

七月、「天台史ノ研究」ヲ刊行ス。

十二月二十八日、「天台史ノ研究」ニ基キ、大谷大學ヨリ文學博士ノ稱號ヲ授與サル。

同 一一、子、 七〇歳

二月九日、僧正ニ補セララル。

二月十日、午前二時十七分、中風症ヲ以テ命終ス。法主臺下ヨリ「冷華院釋文秀」ナル御染筆院號法名並ニ似影ヲ下附サル。

二月十五日、連枝宣暢院殿ヲ導師ニ仰ギ、葬式ヲ營ミ聖徳寺ノ學域ニ葬ル。

(上杉慧岳誌)

思ひ出づることども

住 田 智 見

上杉文秀講師には明治二十年夏以來、親交を重ねたので、種々思ひ出づることがある。性格に於ては先づ正直に注意深く、親切なりしことを忘れることが出来ぬ。他人の論文や講録を見ても或は如何にやと思ふことがあつても、直接に注意することは中々出来ぬものである。然るに、師はこれは違ふて居ると氣づくときは、遠慮なく云ふて呉れたので、非常に力づくよく感じ有りがたく思ふたのである。今や此人を失ふ。甚だ心細く感ずるのである。

師が大正六年七月山命を受けて、稻葉圓成君と共に入支、天台山を主として佛蹟參拜することゝなつた。私は其前年、河野舟橋二師と共に朝鮮行をしたので、支那同行は止めるつもりであつた。併し一度廬山東林寺惠遠法師の遺跡へ參りたい宿願あることを話したことがあるので、頻りに同行を促された。それで入支することになり上海に著き我が大谷派本願寺の別院に入り、共に蕪城輪

番の御世話になつた。兩氏の天台山行の間は上海に滯留せんと思ひたるに、之も師の勧めに由つて同行し、寧波浮陀山より天台山に登り、蘇州、杭州、南京を一覽し、長江を溯り九江に上陸、廬山遠公の遺跡墳墓にも詣し、多年の宿願が達してまことに有りがたかつた。それより漢口漢陽武昌を見、北上して洛陽龍門の佛蹟を拜し、開封府より徐州に出で、北上し天津北京に入り、こゝにて私は兩氏に別かれ、奉天より朝鮮經由で歸朝したのである。此行今より追懷せば師の勧めがなかつたら、遂に入支の機を得なんだであらうと感謝してゐる。この旅行中師の注意深きに感じたが、亦餘りに細事にまで八釜しく申されることもあつて、同行者いさゝか困つたこともあつた。師は私より一年の年長で、當時五十一歳であつたが、そのころ、已に白髯銀の如く實に見事なもので、齡を貴ぶ支那では到る所ぞ珍しがり大いにもてた。天台山國清寺にての如きは、三日間給仕してくれた青年僧は、老

師は七十歳位か」と云ふて、頗る尊敬したことであつた。其追憶の詩がある。

歴遊當日任情娛。今復追懷心更愉。攀附崎嶇尋聖蹟。排擠雲霧入神區。新詩未試江兼漢。舊夢猶迷越又吳。記得杭州城外曉。蓮舟盪槳度西湖。(支那漫遊後日書懷)

又師が大正九年夏、眞宗大谷大學教授を辭任し、加賀の聖徳寺に歸臥された。私も同夏辭任した。同年十月書信に添へて左の絶句が來た。

新詩未有堪吟風。舊鉢舊衣除餒凍。一事報君歸後

情。白雲無恙護吾夢。

これは當時の心狀を思ふて、感禁じがたきものがある。後大谷大學長となり二ヶ年の後、唯信鈔文意を講ずべく夏安居の命を拜し、突如中風症を發し、就床靜養せられたのである。時に昭和八年七月十日朝のことである。自來多少病氣は一進一退、さしひきはあつたが、つるに本年二月十日、七十歳を以て自坊に逝去された。まことに痛惜に堪へぬ。

師の學業閱歷等のことは周知のゑ略する。

(昭和十一年五月十八日朝しるす。)

上杉先生を追憶して

大須賀 秀道

私の上杉師に初めて御目にかゝつたのは、明治三十年の四月ごろであつたと思ふ。それは東京眞宗中學が、淺草の靈舎から谷中の新築校舎に移つた時分で、その舎監室で淺井秀玄師や稻葉榮壽師などと御一緒に、何か頻に話してゐられた眉目清秀の少壯教授が、即ち當時の先生であつた。

當時私は、同中學高等科の二年級に在學してゐたが、たま／＼京都に於ける、白川一派の渥美執事排撃事件の餘波を受け、東京中學もまた久しく休校してゐたけれど、事落着して村上學長初め、齋藤・境野・鷺尾諸教授再び歸學され、三十年四月に、更に授業開始せられることとなつた。その頃、上杉先生は眞宗大學の研究科を卒つて村

上、薩二師の後を承け、一時東京麻布の曹洞宗大學に教鞭を執つてゐられたので、開校と共に宗門の東京中學へ迎へられて、教授せられることとなつたのである。

それで私は、其年の四月から八月まで、『四教儀集註』の講義を先生から聽くことになつた。其頃の高等科二年級の受持ち先生を言へば、村上專精師が『略文類』を、吉田賢龍師が西洋史を、喜田貞吉師が『古事記』を擔任せられてゐたが、先生も其中に入つて餘乘を擔任し、教壇に立たれたのであつた。今から考へてみると、先生の天台學は當時既に恐らく日本に於ける第一人者であつたといふてよい。私共が教室で遠慮なく開解立行の微妙な問題で質問すると、先生は明快に解説を與へ、且つ『自分は何師からそこはかう傳へてゐる』といふやうに答へられた。當時上野寛永寺では、櫻木谷慈薫といふ老師がゐて、天台宗に於ける斯學の泰斗と知られてゐた。私も二三回其講義を聽いたが、たゞ慧澄の講義を讀んでゆくばかりで、「大和上はこゝにかういふ文字を使はれたが、私はかういふ文字に換へた方がよいと思ふ」位のこと、何やら物足らなくて聽く氣になれなかつた。それに較べると先生の講義は、其頃として最も進歩せるものであつた。

この前年の秋であつたか、上杉師と境野師との間に草木國土悉皆成佛といふ問題につき、論戰を交はされたことがあつた。上杉師は京都の眞宗大學で發刊せる、『無盡燈』の上で、境野師は東京の經緯社同人の出してゐる、『佛教』誌上で、草木國土といふ如き非情が果して成佛するや否やについて、互に論陣を張つたのであつた。その時境野師は私に自分の書いた原稿を見せて「君、この原稿を一度讀んでみてくれたまへ。僕は天台の教義がどうやらこゝやら、それは少しも知らない。たゞ自分の頭で判つただけ書いてゐる。上杉といふ男は、たゞ教義がこゝであるといふので、自分で判つてゐないことまで書くらしいから困るなあ。どうも議論ができない。」と、師一流の皮肉を言はれたのが思ひ出される。併しこれは學問の立場として已むを得ないことであつたらう。私は三河岡崎の教校に學んでゐたころから、既に楠講師の門下に上杉といふ俊才があるといふ、噴々たる名聲を耳にしてゐたけれど、京都にゐながら、當代東都の少壯論客境野さんを對うに廻して、一騎討ちをやる花形役者であることを知つたのは此の時であつた。

上杉師はその後引續き東都に居て、巢鴨の大學や中學

で教授せられ、私は眞宗大學卒業の後も、京都にばかりゐるので、御目にかゝる機會が少かつた。谷大移西の後も、御自坊に歸臥せられてゐられたことで、餘り接近する機會は恵まれなかつた。然るに『眞宗大系』が出版せられ、谷大へも再び教壇に立たれるやうになつてから、時々御指導も蒙つて、舊情の温められることとなつた。

今に私の心に印象を留めてゐるのは、先生が叡山へ籠つて天台の加行や灌頂まで受けられた時のことである。これは日本天台を研究するには、是非台密の書を繙き、その傳授をうけなくてはならない。然るに、それは山としての規程があるので、先生は特に比叡山上に何ヶ月も止宿して、加行の時は坊城實皎僧正を傳法師とし、又大田深證阿闍梨から灌頂をうけ、寶藏坊の中に居を占めて、その眞如藏にある台密の藏書を悉く閲覽せられたのであつた。如何に研學の熱意とはいへ、日本天台史の探求のため、その實踐までしてかゝられたといふことは、實に敬服に價する。この熱心があつてこそ、あの没後に光を放つ大著述が完成されたのであつた。

昭和六年八月、先生が谷大學長になられてからは、殊にその恩顧に接したこと勿論である。忘れもせぬが、一

上杉文秀講師を偲ぶ

昨年、七月九日の夜であつた。四條八尾政で廣陵師喜壽の祝宴が張られ、宴が果て、私は、先生と御旅町を散歩して烏丸まで出た。道々相語つてなかくの御元氣であつた。烏丸へ出て自動車をとお勧めしたが、先生は電車でよいと先に乗つてしまはれた。空席がなくて、これと思ふたところ、幸に宗學院の學員がゐるで、席をあけて先生にすゝめた。私はその學員の方に「先生をお宅まで見送りして」と頼んで、途中でお訣れした。

翌日驚いたのは、先生が今朝御發病とのことである。安居の御當番で、開講は已に明日に迫つてゐる。これは大變であると、早速御見舞したれば、奥様の御話に「昨夜お歸りになつて、元氣で遅くまで快く何かと話され、今朝も起きて常の如く勤行し、御飯にかゝらうとして坐つてゐたところ、フト物が言へぬやうになつたので、お醫者さんにお願ひして」といふやうなことであつた。安居講本も既に出版されてゐたことであつたが、御病氣のため、河野講師が急に更めて『安樂集』を講ぜられることとなり、其後私は先生から特に戴いた『唯信鈔文意』の講録が、今に空しく書架の上に残つて、その追憶の情を深めてゐる。

上杉先生の憶ひ出

日下 無倫

一

「上杉文秀先生は偉いもんぢや。その昔、若かりし頃、山田文昭さんの父文成さんの随行員となつて、度々我が寺へ應招布教に來られたもんぢやが、それが一度感奮して上京されたとなると、とう／＼あんなに偉い學者になつてしまはれたのだ。御前もしつかりせにやいかぬ。せめて先生の爪の垢でも煎じて飲むがよい。」これは予が眞宗大學に在學した當時の頃であつたかと思ふ。今は亡き老父の口から、幾度も／＼聞かされた、古い言葉であります。今や父逝いて茲に十有五年、父を憶ひ出づる度毎に、いつも此の言葉を思はずにゐられないのであります。それと同時に予の一生を通じて、上杉先生を忘るゝことの出来ないものたらしめたのは、實にこの遺しおかれた父の一言あるがためであります。

二

明治四十年九月、予は東京巢鴨の眞宗大學へ入學いたしました。残念なことには、専攻科目の都合で在學中一度も教室に於て、先生の御薫陶を受けたこともなく、また卒業後も學校の圖書館で、時折御眼にかゝる位の程度に止まり、御指導をうける機會が大變尠なくありました。ところが、こゝ七年ほど前、宗學院が本山内に創設せらるると共に、先生が宗學院の擔任指導として御上京になりました頃から、大變に御昵懇にしていたゞき、種々と御提撕を賜つたことあります。

今、おほろけながら、當時の記憶を想起し、先生に關する思出の一、二を記してみたいと思ひます。

三

昭和五年七月七日、それは丁度七夕祭の、特に蒸暑かつた夕方でした。一日の業務を終へた予は、上杉文秀、

花山大安の兩先生から誘はるゝまゝに、二師の御供をして洛南の水郷宇治に遊んだことがあります。宇治橋を渡り、平等院をすぎ「花座敷」に一時しましたが、予等に與へられた「浮舟」と呼ばれる一室からは、はるか宇治川西岸の風光が一眸の下に見られて、心往くばかり山紫水明の暮色を賞したことでした。いつも見事な長髯を撫して、謹嚴そのものゝやうな兩先生も、今日に限つて師弟といつたやうな障壁もなく、本當に打とけた氣持で御話することが出来ました。これが予の兩先生に對する、初めにしてまた終りの印象深い會合となつたわけです。そのとき、兩先生から即吟として頂いた色紙には左の如く認められてあります。

菟溪晚關把盃憑。未用橋頭醉喫氷。

兩岸青山看漸暮。水風吹上畫船燈。

庚午七月七日同冷香楠邸遊菟溪俱飲十翠軒分韻得蒸

霞外老迂(印)

多少樓臺西又東。碧山中圻一溪通。

酒旗閃々如招我。渡水早知塵事空。

韻得東

冷華(印)

この時、予も調子に乗つて、左のやうにヘナブリ式のもの

上杉文秀講師を偲ぶ

のを詠んで、兩先生に笑はれたことでしたが、今から思へば、その笑ひも亦なつかしい思出の一つであります。

清山をなかばこがして陽は入れり

宇治の川瀬の浮舟の窓

四

昭和七年五月十四日、大谷大學第一回の卒業生として住田智見先生など、一所に校門をくぐつた齋藤現映氏が、宗學院學員として在京中、七十三歳の老齡を以て獨り淋しく洛西帷子辻の寓居に逝き、翌日、蓮華谷火葬場に密葬したことがあります。當時、予は宗學院の事務に關係を持つた關係上、葬儀萬端の世話をしましたのでしたが、とりあへず、同氏の訃報を齎らして宗學院擔任指導の上杉先生の許を訪つねました。その時先生には、實に感慨無量といつたやうな御顔付で、

「あゝ、とう／＼天野現映君(齋藤氏は舊姓を天野といへり)は死んだ

か。氣の毒なことをしたものだ。明日の密葬には必ず

出向く。宗學院指導としてよりも友人として往かう。

友の最後を出来るだけ飾つてやることは、人間としての

の徳義だ、義務だ。」

と、俳優のする獨白のやうな、そしてまた、予に對して

言はれるやうな、何れともつかない口吻を以て仰せられたが、この時、先生の兩眼には露の涙が光つて見えました。予はこの時ほど、尊とい先生の姿、溫情の籠つた一面に接し得たことは曾てなかつたのであります。

さて翌日の密葬には、先生が特に出棺勤行の導師をいたされたことも、つゞいて予が茶毘所勤行の調聲をしたことも、皆な臙氣ながら記憶に存することでありませぬ。

五

その他、先生に關する思出はいろ／＼ありますが、その中、ふと頭に浮んだ「笑」と「涙」の印象をかきつらねたまでです。これによつて、先生の高徳の少しでもきづくことのなきやう念願して止みませぬ。(十一、五、二四)



師秀文杉上 故



師安大山花 故